

平成30年度「小学校学力向上対策支援事業」に係る 言語能力育成ハンドブック活用推進協議会 兼 第2回学力向上支援教員等協議会

【目的】小学校（義務教育学校前期課程を含む、以下「小学校」とする）を対象に、平成30年度学力調査結果を踏まえた授業改善についての説明や、言語能力の育成を目指した授業実践についての情報交換を通して、児童の学力向上に向けた取組の改善充実に資する。

【日時】平成30年8月20日（月） 10:30～16:15

【会場】コンパルホール 3階多目的ホール

1 開会行事

大分県教育委員会挨拶 大分県教育庁義務教育課長 米持武彦

【要旨】

- 「芯には3つ目の意味がある。主役であり伸びる子どもたちという視点」
 - ・今大切なこと・・・「子どもの視点・目線で授業をつくる」
 - ・深い学びを実現する教師の役割・・・一言でいえば、子ども自身が「つなぐ」ことができるように指導支援すること。
 - ・3つの柱（生きて働く知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学びに向かう力・人間性等の涵養）をバランスよく育てなければいけない。
＜知識と知識をつなぐ・知識と場面をつなぐ・知識と目的・手ごたえをつなぐ＞



2 行政説明「学力調査の分析と指導の改善に向けて」

①平成30年度大分県学力定着状況調査の結果について（義務教育課 長谷部英樹）

- ・小学校は昨年度に引き続き全ての教科・区分で偏差値50を上回っている。
- ・正答率だけでなく、目標値との差の分析をすることが大切。
- ・「弱点克服のためのフォローアップワークシート」の活用をしていただきたい。
- ・全県的にみると「知識」に比べ「活用」に課題がある学校が多い。

②平成30年度全国学力・学習状況調査の結果について（義務教育課 長谷部英樹）

- ・今年度は3年ぶりに理科が加えられた。
- ・全ての教科・区分で全国平均を上回ることができた。
- ・学力の経年変化（大分県と全国との平均正答率の合計の差）も年々良好な結果に向かっている。

○小学校算数（義務教育課 松村義広）

- ・算数Aは7年連続で全国平均を上回っている。無解答率は全問が全国平均を下回っている。
- ・算数Bは10問中7問が全国平均を上回っている。全国平均を下回った3問は全て記述式問題。「記述式問題」に課題があるといえる。領域では「量と測定」に課題がある。
- ・質問紙では、算数の勉強が好きですか。の肯定的評価が減ってきているのが気になる。算

数の内容はよく分かりますか。の肯定的評価は増えている。

- ・ 解答類型を基にして子どもたちがどこで躓いているのか各学校で分析をお願いしたい。
- ・ 「説明の基本形」等を利用して手順の説明を学年によって段階的に指導していく必要がある。

○小学校理科（義務教育課 舟越宣之）

- ・ すべての分類・区分で全国平均を上回っている。
- ・ 理科が好き 81.7% わかる 89% 好きではないがわかる。
- ・ 特に「自然事象についての知識・理解」が全国を大きく上回っている。
- ・ 全国よりは上回っているが、「活用」と「科学的な思考・表現」が課題である。
- ・ 授業改善のポイント
 - ①理科の見方・考え方を働かせて、活動のゴールとその過程を示すこと。
 - ②自然の現象を、量的な関係や時間的な関係などの科学的な視点で捉えること。

○小学校国語（義務教育課 大渡克教）

- ・ 国語Aは、すべての領域で全国値を上回っている。
- ・ 国語Bは、全問において、正答率が全国値以上であった。
正答率が5割未満の問題が3問
- ・ 授業改善のポイント
 - ①適切な言語活動とその充実が図られる単元設定を行う。
 - ②より具体的な評価規準が設定できているか。
 - ③学校全体でもアナウンスをしていただきたい。



3 説明「情報活用能力を高めるための工夫について」（教育財務課 土井敏裕）

- ・ この中で、インターネットにつながらないものはどれでしょう？
サッカーボール、消しゴム、くつ、ボタン、トイレ → 消しゴム
- ・ すべてのものは、あと4年でネットにつながる、と言われている。
- ・ Society 5.0 とは？ 「超スマート社会」
- ・ Society 5.0 に向けたリーディング・プロジェクト
 - I. 「公正に個別最適化された学び」を実現する多様な学習の機会と場の提供
 - II. 基礎的読解力、数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力をすべての児童生徒が習得
 - III. 文理分断からの脱却
- ・ STEAM教育とは？ → 科学、数学、芸術領域に力を入れる教育方針、教育方法
 - Science
 - Technology
 - Engineering
 - Art
 - Mathematics

- ・ 予測困難な時代に一人一人が未来の造り手となる。
- ・ これだけ世の中が変わっているのに変わっていない



いのは「教育」

- ・しかも日本の教育は、世界の中でも遅れている。
- ・平成30年度以降の学校における ICT 環境の整備指針は
大型提示装置の常設
実物投影装置の常設
学習者用コンピュータ 3クラスに1クラス分程度の配備
指導者用コンピュータ（教員用） 授業を担当する教員それぞれに1台分の配備
充電保管庫 学習者用コンピュータの充電・保管のために必要な台数の配備
ネットワーク 普通教室及び特別教室における無線LAN環境の整備
- ・情報活用能力とは、どんなものでしょう？
→情報及び情報手段を主体的に選択し、活用していくための個人の基礎的資質です。
- ・情報活用能力の3観点とは？
 - 1 情報活用の実践力
 - 2 情報の科学的な理解
 - 3 情報社会に参画する態度
- ・表現方法・評価方法の多様化
- ・主体的・対話的で深い学びの実現のために、ICTを積極的に活用して欲しい。
- ・Technology のベクトルを（生活・遊び）から（学び・社会を変える・人をつなぐ）に変えて欲しい。

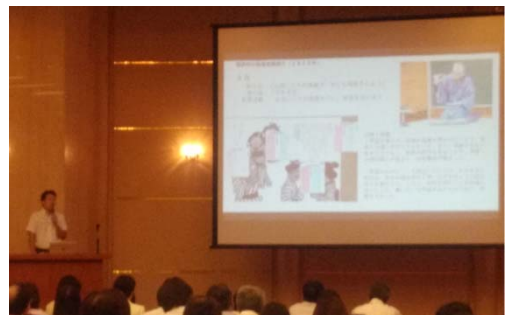
13:50～14:35

実践発表 「言語能力を高める取組について」

発表者：佐伯市立佐伯小学校 矢田 倫一 教諭

「内容」

- ① 学力向上支援員として行った単元を貫いた言語活動を位置づけた国語科の授業実践紹介。
- ② 思考ツールを用いた実践
- ③ 佐伯小学校での授業実践、取組
 - ・思考ツールの活用
 - ・地域資料の活用
 - ・掲示物
 - ・本校の紹介と今年度の取組



「これまでの国語科の授業実践」2015年～2017年

「国語科における言語能力とは？」

言語能力を育成する中心的な役割を担う国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成する。言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成しようとしているのは、この考え方を示したものである。

国語科において育成を目指す資質・能力は「知識及び技能の習得」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で整理している。

（指導要領解説書より抜粋）

「思考ツールを取り入れた授業実践」

ベン図、クラゲチャート、マトリックス、フィッシュボーン図、イメージマップ、PMI、座標

「授業を終えて」

○教材で佐伯の偉人を扱うことで、偉人について身近に感じることができた。さらに、これからの生き方、ふるさとに愛着を持つ心が育った。

○教科書教材と同じような書きぶりの伝記集を教材化したことには大きな効果があった。

●交流が、ただの伝え合いにならないような工夫が必要である。

14:40～16:10

グループ協議「実践交流 児童の言語能力を高める取組について」

○41グループ（1G：5人）に分かれて、実践交流を行った。

「内容」

- ・各学校の実践交流
- ・実践から出てきた成果と課題

先生方は、非常に意欲的に取り組んでいた。

○2つのグループの発表

「主な内容」

- ・言語活動は、国語科だけではなく、教科横断的に育成する必要がある。
- ・児童の発達段階に応じて、思考ツール等を活用していく。
- ・一方的に発言する児童や、受動的で自己主張ができない児童への対応。
- ・まずは、個性を認めて誉めるところから始めるとよい。

○感想等

- ・「言語能力」育成ハンドブックをもっと活用していきたい。
- ・教科横断的視点で、自校の職員に広げていく必要がある。
- ・一人ひとりの実態を具体的に掴み、発達段階や個に応じた指導が必要になる。
- ・大分県の学力調査の分析がわかりやすく、現状が把握できた。
- ・自分たちが経験したことのない時代がこれから来る。その時代を生き抜いていく児童に、どんな力が必要か、改めて確認できた。

